

## 「え？」と「は？」の談話機能

富樫純一(筑波大学大学院)\*

### 0. 問題の所在

日本語の談話において、「え？」と「は？」は非常に似た振舞いをする。

(1) A あのー、市役所はどこですか？

B え？/は？

(2) A 今日の発表は中止です。

B え？/は？

「え？」および「は？」を直接扱っている研究は管見の限り見当たらない。わずかに会話のストラテジーの観点から「え？」「は？」を聞き返し行動の中の表現形式の一種として扱っているのみである(尾崎(1992)、堀口(1990, 1997))。例えば、堀口(1997)では、以下の例を挙げ、それぞれ、(3)が反復要求、(4)が説明要求という「聞き返し要求」の例であると説明している。

(3) 1A : あのう、読売新聞はありますか。

2B : はっ？ 何という新聞ですか。 (堀口(1997), p.151)

(4) 1A : お引っ越し、大変でしょうね。

2B : いえ、それが楽なんですよ。

3A : えっ？ (堀口(1997), p.155)

しかし、これらの要求行動と「え？」「は？」とが明確な対応を形成しているわけではない。異なる要求として解釈される文脈においても、「え？」「は？」を用いることができる。つまり、「え？」は説明要求」といったような位置付けは困難なのである。

そこで本発表では、「え？」と「は？」の本質的な機能の探求を目的とする。具体的には、心内での何らかの処理を示す標識、という観点から「え？」「は？」を捉えていく。

### 1. 制約

本節では、「え？」と「は？」の発話制約を観察する。「え？」と「は？」は似通った状況での発話が可能であるが、それでも、その使用には若干の異なりが存在する。

#### 1.1. 「え？」「は？」の位置/直前の発話

基本的に、「え？」「は？」は turn の冒頭にしか位置しない。

(5) A 明日はどこに行くんですか？

B \*うーん、明日は、え？/は？ ピクニックに行くんですよ。

(6) A 宝くじ当たったよ。

B え？ ほんと？/\*ほんと？ え？

---

\* jtogashi@lingua.tsukuba.ac.jp

「え？」「は？」は文中あるいは文末には位置できない。また、談話冒頭での発話も困難である。これは、「え？」「は？」が直前の相手の発話に反応した表現であることを示す。「聞き返し」という観点から見た場合、それは自明的に導き出される制約である。

また、「え？」「は？」ともに、要因となる相手の発話に関しては制限がない。疑問・命令といった表現に対しても発話可能であり、さらには、例えば、相手の発話がよく聞こえない場合にも、「え？」「は？」を用いることができる。

(7) A ...が.....で...と.....なんだって。

B え？ / は？

「聞こえない」とは内容を把握していないということである。そこでも「え？」「は？」が使用できる。相手の発話形態には(直接的には)依存しないのである。となると、相手の発話に反応するという事は、見かけの反応でしかないことになる。「え？」「は？」の本質はもっと別のところにあると考えられる。

## 1.2. 独言での使用

「え？」「は？」の本質に関して要点となるのは、「え？」「は？」が独り言でも使用可能である点である。

(8)(何かを思い出して独り言で).....え？ / ??は？ これは違うよなあ。

(9) A 大通りへの道順を教えてください。

B あそこを右へ、.....え？ / ??は？ 違うな。左に曲がるといいんですよ。

(10)(予期しない状況を目撃して)え？ / は？

(11)(データを計算機に入力して答えを出す、という作業中に独り言で)

コレを入力してっと。.....合計は、...は？ マイナス200？ そんなバカな。

いずれも許容度に問題はない((8)(9)の「は？」の低さに関しては後述する)。「え？」と「は？」はともに独り言でも使用することができる。これは「え？」「は？」が「聞き返し」を直接的に要求するわけではないことの傍証でもある。つまり、相手の発話(言語行動)を直接の要因として持っていないのである。相手の発話がか聞こえない場合にも「え？」「は？」が使用可能であることを踏まえると、「相手の発話を聞いてちゃんと理解する」という過程が少なくとも必須条件ではないことが分かる。

ただし、それでも「え？」と「は？」の発話には何らかの情報の存在が不可欠である。何の予備情報もない談話冒頭で「え？」「は？」を発話することはできない。

## 1.3. 「は？」の+ 制約

今度は、「え？」と「は？」の違いを見てみる。先に挙げたとおり、直前に存在する情報がどのようなものであれ、「え？」と「は？」はともに問題なく用いることができる。しかし、「え？」「は？」直後の発話に関しては、以下に見るように「え？」と「は？」で明らかな違いが確認できる。

(12) A 昨日、学会に行ってきたんだ。

B1 え？ どのの？ / ??は？ どのの？

B2 え？ 広島のと？ / ??は？ 広島のと？

(12)では、「え？」と比べると「は？」のほうが許容度が下がる。Aの発話から得た「学会」という情報に対して、「どこで行われた学会か」という補足的・必然的情報を「は？」と共起させることが難しいのである。このような制限を「+ 制約」と呼ぶ。

+ の要素は補足的・必然的な情報に限られない。

(13) A 1 たす1は3です。

B1 は？

B2 は？ 1 たす1は3？

B3 は？ なに言ってんの。

B4(?)は？ 1 たす1は2でしょ。

(13)の例において、「は？」の単独使用(B1)、直前発話の繰り返し(B2)、直前発話の聞き返し(B3)、の場合は特に問題なく「は？」発話が可能であると思われる。しかし、話し手の持つ情報の提示(B4)の場合、その許容度は相対的に低くなる<sup>\*1</sup>。

(14) A 今日は授業ないよ。

B1 は？

B2 は？ 授業ない？

B3 ?は？ ウソ？

(14)もB1、B2は自然な発話であるが、B3の許容度は低い。話し手の持つ情報「授業がある」という情報と直前に得られた「授業がない」という情報、その比較結果による判断提示「授業がないのはウソ(に違いない)」と「は？」とは共起しにくいのである。つまり、判断も含めた話し手の情報も何らかの+ な情報と捉えると、これらの許容度の差も+ 制約に還元できる。

「は？」と違い、「え？」には+ 制約がない。したがって、「え？」と「は？」には関連情報の発現という点において差異があることになる。

## 2. 機能

「え？」「は？」の発話には「何らかの情報が存在している」ことが唯一の前提となっている。ここから、「え？」「は？」の本質的な機能は話し手自身の心内における処理標識であると考えられる。

「え？」「は？」が何らかの情報に対する反応としてしか現れないのは、その情報に関する処理を行っているからに他ならない。その処理とは「情報(データ)の不整合性の比較検討」である。

元となる情報(例えば相手の発話した情報)と、話し手自身が持つ情報とを比較検討し、その二つの情報に異なりがある場合、「不整合」と結果が出る。つまり、ある二つの情報の比較による「不整合」標示が本質的な機能なのである。そして、「え？」と「は？」の違いは元の情報のどの部分を比較検討するか、という違いに集約される。

以下、「え？」「は？」それぞれについて考察を試みる。

<sup>\*1</sup> かなり微妙な内省であり、各例においての差異も認められる。これに関しては語用論的な影響が強く働いていると考えられる。3節で取り上げる。

## 2.1. 不整合マーカ―としての「え？」

「え？」には+ 制約がないので、関連した情報を提示することが可能である。

(15) A 太陽が地球の周りを回っています。

B え？ 違うよ。/え？ 地球が太陽の周りを回ってるんだよ。

これはつまり、直前の処理情報と自身の心内領域<sup>\*2</sup>に蓄えられている情報がともに活性化<sup>\*3</sup>しているということである。(15)では、「太陽が地球の周りを回っている」というデータ、「地球が太陽の周りを回っている」というデータ、そのいずれもが心内において活性化しているのである。話し手の持っているデータが(関連情報として)活性化しているということは、相手の発話から得たデータを、その関連情報も含めて、ある程度の段階まで処理したということである。

(15)の場合は、完全な関連情報ではなく、一つの知識に関しての、話し手と聞き手の持つデータの不整合を提示していた。もちろん「え？」は、直前のデータに関連したデータを示すこともできる。

(16) A 太郎、こないだテレビに出たんだって。

B1 え？ ニュース？ それとも、ドラマとか？

B2 え？ なんの？

これは「え？」発話時にそのデータに関するあらゆる視点からの検索を行っていると思えることができる。でなければ、「え？」の直後に、関連した情報を続けざまに発話することは難しいはずである(B1)。

「え？」発話時に行われる処理は、得たデータの処理だけではなく、話し手のデータベースにアクセスし、関連情報を取り出して比較検討している。そして、その結果が不整合であることを「え？」でマークするのである。(16)に即して説明すると、

- (17)1. 直前データ : 太郎に関して「テレビに出た」というデータ
2. 関連情報 : 「太郎」「テレビ」等に対して関連した情報の活性化
3. 話し手のデータ : 太郎に関して「テレビに出た」というデータが存在しない
4. 比較検討 : 二つのデータの不整合による「え？」発話

という処理過程になっていると考えられる。

つまり、「え？」発話には常にデータの活性化という過程が伴っているのである。そして、得られたデータの情報の結びつきが、話し手のデータベースにおいては結びついていない。その「不整合」を示すのである。

独り言の場合も同様に捉えられる。

(18)(何かを思い出して独り言で).....え？ これは違うよなあ。

(19)(予期しない状況を目撃して)え？

\*2 本発表では、言語処理に関する仮想的な領域を「心的領域」とし、その内部が「バッファ」「データベース」に区分されていると仮定する。おのおのの領域について、「データベース」は知識の格納場所であり、「バッファ」は作業領域である。そして、言語の処理はバッファ内にデータベースの当該情報へのリンクが書き込まれることで行われると考える。この仮定に関しては、談話管理理論の一連の研究によるところが大きい。先行研究を参照のこと。

\*3 活性化(activation)の概念に関しては、Chafe(1987)等を参照。本発表では、バッファ内の情報が常に活性化していると仮定する。

いずれの場合も、話し手が持っていない(活性化させていない)データが得られることになる。その得たデータを比較検討すると同時に関連データを活性化させる。

「え？」の背後では総合的なデータのチェックを行っているといえる。得たデータそのものの検索、およびそのデータがどのような流れで発話されたか、といったような、より広範囲での検索も行われている。したがって、「え？」の直後に+ 情報を発話することが可能なのである。

また、「え？」は次のような例が許容される。

(20) A んーと、日付とチャンネルを合わせて、予約ボタンを押すんだよ。

B え？ え？ え？ よく分かんない。

一つの turn で複数回の使用が可能ということは、データの様々なパラメータをチェックするという、データそのものの検索では当然の処理を行っていることの傍証である。したがって、「え？」の場合は複数回生起が可能なのである。

## 2.2. 不整合マーカ―としての「は？」

では、「は？」の場合は、どのような「不整合」性をチェックしているのだろうか。

(21) A 昨日、学会に行ってきたんだ。

B1 ??は？ どのの？

B2 ??は？ 広島の？

(22) A 今日の練習は中止です。

B は？

「え？」と異なり、「は？」には+ 制約が認められる。+ 情報が発話できないということは、+ が話し手の心内で活性化していないということである\*4。つまり、「は？」は得られたデータを話し手のデータベースに照らして検討しているわけではない。「は？」の背後で行われているのは、「データの属性」のチェックであると考えられる。

(22)で説明すると、「今日の練習」に関するデータ「中止」を得る。しかし、このデータに基づいて、話し手の心内のデータベースにアクセスするわけではない。今現在バッファに書き込まれている情報に「今日の練習」に関するデータが存在していない、ということのみを検索しているのである。そのデータが話し手の心内において活性化しているかどうかをチェックしているのである。そして、「データがバッファにない=非活性」となり、そのデータに対して不整合性が与えられ、「は？」が発話される。

また、「は？」では独り言の場合に差が生じる。これは(23)が直接心内の計算結果を参照しているのに対し、(24)では、外的な計算結果がその直接的な要因である。つまり何らかの形で心内において活性化しているのではない。よって(24)は自然な独り言となる。

(23)??ここで関数に x を代入して、...は？ 違うな。先にこの式を展開するんだ。

(24) コレを入力してっと。.....合計は、...は？ マイナス200？ そんなバカな。

さらに「え？」の場合((20))と異なり、「は？」は同一 turn 内での複数回生起が難しい。

\*4 (17)での、第二段階の処理が実行されていないのである。

(25) A んーと、日付とチャンネルを合わせて、予約ボタンを押すんだよ。

B ??は？ は？ は？ よく分かんない。

「は？」は「データの属性が活性であるかないか」という一つのパラメータをチェックする。したがって、一度検索が完了すればよく、同じデータに対してもう一度検索するということはあり得ない。よって、「は？」の複数回生起は許容されないのである。

### 2.3. 「え？」「は？」の機能

以上、分析してきた結果をまとめると次のようになる。

(26) 「え？」と「は？」：得られたデータに関しての不整合性を標示する。

(27) 「え？」の機能：データの内容の比較検討による、結果の不整合性を標示する。  
データベースへのアクセスによる比較検討。

(28) 「は？」の機能：データの属性の比較検討による、結果の不整合性を標示する。  
そのデータが非活性情報である場合に、不整合となる。「は？」発話時にはデータベースへはアクセスしない。

「え？」と「は？」のもっとも大きな違いは、データをデータとして処理する過程があるかないかである。それはつまり、「そのデータ(および関連データ)が活性化するかどうか」に等しい。「え？」「は？」の本質的な機能を上のように記述すると、以下に挙げるような「え？」「は？」の微妙な差も説明可能となる。

(29) A シュレディンガーの猫って知ってる？

B え？ なにそれ？ / は？ なにそれ？

(30) A .....でも、結構イイところもあるよね。

B (顔を赤らめつつ)えっ？ / ??はっ？

(31) A 日本の政治も転換期だね。

B 国民一人一人がちゃんと理解していかなきゃね。

A 明日は晴れるかな。

B (?)え？ / は？

(29)はどちらも許容されるが、「は？」のほうがその話には興味がないという読みが現れる。これは、関連データを活性化させていないためである。(30)の「顔を赤らめる」ことは、相手の発話意図をちゃんと理解(処理)したということであり、そのデータが活性化していることに他ならない。したがって活性化の過程を伴わない「は？」とは合わない。

逆に「え？」のほうが不自然になる(31)は話題転換の例である。突然の話題転換は得たデータを活性化させにくいので、活性化の過程が存在する「え？」は若干許容度が下がる。逆に「は？」が自然なのは、属性のみのチェックを行っているからで、関連のあるデータの取り出しまでは行っていないのである。

最後に「聞こえない」ということについて考えてみたい。既に見たとおり、相手の発話が聞こえない場合には「え？」「は？」のどちらでも反応することが可能である。この選択に関しては話し手の態度に大きく依存すると思われる。

(32) A ...が.....で...と.....なんだって。

B え？ / は？

「え？」の場合は、データの比較検討を行おうとしたが、結局、内容の把握ができず、処理が止まってしまったことにより「え？」が選択されると考えられる。つまり関連したデータを活性化しようとする話し手の意志が認められる。

「は？」の場合、聞こえないのでそのデータが活性化しているかどうかチェックできない。そういうデータはすべて非活性なものとして処理しようとする場合には「は？」が選択される。つまり話し手に新しいデータをどうかしようという意志がないのである。

この違いは、語用論的效果とも重なってくる。次節で取り上げる。

### 3. 語用論的な効果

本質的な機能から派生する語用論的な効果について検討してみる。

(33) A 明日は雪が降るかもしれないね。

B え？ / は？

A 雪降るかも。

(34) A 明日は雪が降るかもしれないね。

B え？ / は？

A 冗談だよ。

「え？」「は？」を「聞き返し」と取るのは、あくまで「え？」「は？」発話を受ける相手である。どのように解釈するかによって(33)(34)のように応答が異なる。その意味では、「聞き返し」は解釈でしかないといえる。

つまり、「え？」「は？」を確認要求や説明要求として位置付けるのは、解釈なのである。逆に言えば「え？」「は？」発話のみではその厳密な区別(どんな要求か)をすることができない。すなわち、「聞き返し」は語用論的な効果でしかないことになる。

また、「え？」「は？」には次のようなヴァリエーションが存在する。

(35) A 今日これからテストをします。

B えーっ。

(36) A それでも地球は回ってる。

B はあ？

「え？」「は？」の機能を「不整合標示」とすると、「えーっ」や「はあ？」などの従来、「意外・驚き」と呼ばれてきた「え？」「は？」のヴァリエーションも説明できる。

(35)は話し手の持つ情報が「テストはしない」であり、直前データと不整合であることをことさらに強調する効果を持つ。(36)は活性化されていない不整合なデータとしてチェックしたことを示す。その強調形である。

これについては「態度の表出」という概念が有効となる。「態度の表出」については、定延・田窪(1995)に記述がある。以下、引用する。

(37)「話し手が「あの(一)」を用いることにより、発話形式に気を配っているという態度を表出し、結果として発話のぞんざいさ・さしでがましさを減殺できる  
ということは、容易に理解できる」 (定延・田窪(1995), p.86)

(38)「「ええと」や「あの(一)」を使いながら、実際に演算領域確保や言語編集をお

こなっているとは必ずしも限らない。話し手がおこなっているのは、あくまでそうした態度の「表出」にすぎないからである」 (定延・田窪(1995), p.87)

したがって、「態度の表出」を聞き手が認めれば、機能的に矛盾が生じる例も許容度が上がる。そのため、各例の内省に微妙な差異が生じているのである。

「え?」「は?」が交替可能な例に関しては、聞き手にその処理方法が委ねられるからであり、その点では「態度の表出」的な効果のほうが際立つ可能性は否定できず、実際の内省の揺れがそれを示してもいるのである<sup>\*5</sup>。

#### 4. おわりに

以上、本発表では「え?」と「は?」の本質的な機能について考察してきた。議論に関してはまだ発展する余地を残している。しかし、このような心内の処理を表す標識(間投詞、感動詞の類)に関しての一つのアプローチの方法および有効性を示せたのではないだろうか。

#### 主要参考文献

- Chafe, Wallace L.(1976) Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. *Subject and topic*, ed. by Charles N. Li
- Chafe, Wallace L.(1987) Cognitive constraints on information flow. *Coherence and grounding in discourse*, ed. by R. Tomlin
- 堀口純子(1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』No.71
- 堀口純子(1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 金水敏(1992) 「談話管理理論からみた「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19
- 金水敏・田窪行則(1998) 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」『音声による人間と機械の対話』堂下他編：オーム社
- 尾崎明人(1992) 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』カッケンブッシュ寛子他編：名古屋大学出版会
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail(1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50
- 定延利之(2000) 『認知言語論』大修館書店
- 定延利之・熊谷吉治・苅田修司(1999) 「用語解説 旧情報と新情報」『文法と音声』音声文法研究会編：くろしお出版
- 定延利之・田窪行則(1995) 「談話における心的操作モニター機構 心的操作標識「ええと」「あの一」」『言語研究』No.108
- 田窪行則(1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学 その提言と建設』三省堂
- 田窪行則(1995) 「音声対話の言語学的モデル 談話管理標識としての感動詞」『情報処理』Vol.36, No.11
- 田窪行則・金水敏(1996a) 「対話と共有知識 談話管理理論の立場から」『言語』Vol.25, No.1
- 田窪行則・金水敏(1996b) 「複数の心的領域における談話管理」『認知科学』Vol.3, No.3
- 田窪行則・金水敏(1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編：くろしお出版

\*5 「はあ?」の場合は、

(a) A それでも地球は回ってる。

B はあ? 地球が回ってるわけないだろ。

のように、活性化の処理が完了している場合でも用いることが可能である。これはまさに「態度の表出」が前面に出されたものであろう。